

災いに備えて

ウイルバート・R・シエンク

鎌田 泰行・訳

序

私たち人間は誰も、今自分の周りにいるのはどんな人かというイメージを自然と自分のうちに作り上げているものです。知らない人々といるときは、特にそうです。これは防御機構です。自分といるのはどんな人なのか知らなくてはなりません。私たちに近づいてきている人がほほえんでいるのか、顔をしかめているのか、威嚇するような態度をとっているのか、助けの手を差し伸べようとしているのかの識別は大事です。この見知らぬ人は私にとって危険な存在なのか、それとも助けしてくれる人なのか？ 私に近づいているあの男性は武器を持っているのか？ 時々、ラジオやテレビの番組で警察官が容疑者を特定していくプロセスが取り上げられます。容疑者はどんな態度だったのか、何を着ていたのか、何を言ったのか、他の人は関わっていたのか、などの情報が手がかりになります。「行いは口より物を言い (your actions speak louder than your words)」という慣用句があります。私たちのいわゆる「ボディーランゲージ」はよく見られているということです。たとえば口では嘘を言っても、ボディーランゲージでは嘘を言えないということはよく知ら

れています。

さて、今回のテーマであるところの、キリスト者であること——いわゆる「クリスチャン・アイデンティティ」という言葉は新約聖書に登場しませんが、「キリストに在る」こと、「御霊の実」を結ぶこと、そしてキリストに似た人格を持つことについては聖書に豊かに綴られています。「クリスチャン・アイデンティティ」について考えることは、私たちのあり方がいつも私たちが気づかないような仕方であらわになっているということを思い出させてくれます。それゆえ、有意義な営みです。

新約聖書には、キリスト者の弟子としての歩みに関して、はつきりとした規準が書かれています。イエス様が「だから、あなたがたは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪しき者から来ることです。(マタイ五・三七、改訂標準訳)」「訳注…本稿の引用箇所は新改訳を用いるが、場合によっては他の日本語訳を用いるか、この箇所のように英訳を日本語にする」と言われたことから、人格と行動は一貫していなくてはならないことがわかります。ある人の生き方が「自分はイエス・キリストの弟子である」という告白と一致しているかどうか、私たちは注目します。教会の歴史をひもとくと、キリスト者の証しが力強く、魅力的で、真実だった時代があったことを私たちは知ります。その一方、残念ながらキリスト者が不誠実で、イエス・キリストの御心になわなない生き方をし、その結果私たちの主の御名が蔑まれ、辱められることもあったことも、私たちは知ります。

「アイデンティティ」は、近代において重要かつ中心的な概念です。「アイデンティティ」が近代において鍵となる概念になったということは、社会のあり方が、集団中心の伝統社会から、「自己」にかかりきりの近代社会に移行したことを意味します。ところで集団と個人に関しては、キリスト者は、その両者をどちらも欠かすことのできない緊張関係のうちにありと捉えなくてはなりません。集団なくして「個人」は存在せず、また献身的な個人たちの存在がなければ「集団」はないのです。

家族の場合、子どもは母と父の間に生まれることによつてその一員になります。一方、キリストの体なる教会（Iコリント二・二一―三二）の一員となることは自発的、主体的なことです。主体的に献身していることが、クリスチャン・アイデンティティの基礎でもあります。

アイデンティティという概念を通常私たちはいくつかの意味で用います。

1. アイデンティティは人を特徴づける本質的要素によつて成り立ちます。すべての人はユニークです。双子であつてさえ、全く同じということはありません。もしそうでなければ、私たちは人と人との間を判別できません。もちろん、誰かについて話すとき、その人がある民族の一員であるとか、ある言語を話すとか、ある地域に住んでいるとかいうような、一般的特徴によつてその人について語ることもできますが、その人固有の特徴について言及することなくしては、その人のアイデンティティを理解することはできません。このことはまた、一人のアイデンティティは何層から成ることも示唆します。

2. アイデンティティは人と他者が関わる中で見られ体験されるものです。どういふことかというところ、誰かの本当の品性は態度、行動、言葉を通して常にあらわになつていくということです。先述のとおり、「ボディ・ランゲージ」は言葉と違つて偽ることができないのです。

3. アイデンティティは集団がその人のうちに培つた価値からなるものです。この理解は、人を形作るのに寄与した環境や文化的背景に注目します。私たち一人一人は特定の家族システムの産物であり、特定の言語を話し、特定の共同体に所属しています。その共同体は、より大きな地政学的システムである国家の一部です。国家には、全構成員が受け入れることが望まれる文化的価値観があります。個人の「文化化 (enculturation)」「訳注…人が文化を身につけること」において、まず子どもの両親が子どもの文化化に寄与し、次いで親戚全体、地域、学校がそれを担うようになります。それぞれの世代は次の世代に儀式、神話・伝承、祭り、長い教育過程などを通して、基本的な価

値観を継承します。なお、多くの近代国家は何百万もの移民の人々を受け入れることを通してより多文化的になっています。多様な背景を持つ移民を同化させていく過程は複雑で時間がかかります。そして移民は新しい社会に移るに従って、新たなアイデンティティを持ちます。また、この新たな移住者たちによって社会そのものも変えられていきます。

4. クリスチャンのアイデンティティは、神様がこの世界で進展させている物語、すなわち救済史を学び、それに主体的に参加することによって形成されます。人は福音の招きに応答して、自ら望んでイエス・キリストの弟子として歩み、キリストの体の一員として生きる選択をするとき、この物語を成す一人になります。そのため、それまでのあらゆる帰属意識は、キリスト者であることと比べて二義的なものになります。一人の人がイエス・キリストを主と受け入れ弟子としての歩みを始めるとき、教会は新しく加わった人に、「キリストの」体の一員としての責任ある実り豊かな生き方ほどのようなかを教えます。その労力は、まるで親が自分の子どもに費やすもののように大きいのです。イエス・キリストは弟子たちに神の御国について教え、彼らのアイデンティティをキリストの似姿にするための一連の**実践** (practice) プラクティス 「訳注… 実践、慣行、修練などの側面を含む概念。本稿では「実践」と訳す」を与えました。これらの**実践** プラクティス が私たちの行動と応答のあり方を定めます。私たちの行動がキリストに似たものであるとき、人々はそれに気づきます。今回のシンポジウム・テーマが示唆するとおり、主の弟子は「小キリスト」となるのです。

震災後の日本におけるクリスマスチャン・アイデンティティ

今回のシンポジウム・テーマは、「震災後の日本」という文脈でクリスマスチャン・アイデンティティについて再考することです。このテーマが選ばれた理由は何でしょう。日本におけるクリスマスチャン・アイデンティティが二〇一一年の東日本大震災によって重要な変化を経験したので、それについて省みるために集まったということかもしれません。あるいは、大震災から五年経過した今、仮に大災害が再びやってきたとすれば、そこに日本でキリスト者として証しをする新たな機会があることを、皆さんは意識しているということかもしれません。どのような経緯でこのテーマになったにせよ、クリスマスチャンとしてのアイデンティティについて現代世界の文脈で私たちが捉え直し続けることはいつであつても有益だと私は考えます。今日このテーマについて考えることは、皆様にとつて、これから先どのような状況であれ、「小キリスト」として歩むことへの決意を新たにするきっかけとなるかもしれません。

「災害」の意味を考えることから始めましょう。まず連想されるのは、いのちと資産の大規模な破壊です。二〇一一年三月十一日、マグニチュード九・〇の、おそらく日本の歴史上で最大の地震が発生し、その五〇分後に起きた強力な津波により福島第一原子力発電所に深刻な被害が及び、死と広範にわたる破壊を起こしたことなどがまさにそれです。日本は、カリフォルニアと同様に、極めて地震が発生しやすい断層の上に位置しています。

災害の原因は様々です。自然の力（例えば台風、地震、火山、干ばつ、山火事、洪水など）は死と破壊を頻繁にもたらしめます。また、異なつた形の災害も人の命を脅かします。科学的医学の発展によつて医療は発展したものの、過去四〇年において危険な新しい病（近年ではHIV／エイズ、SARS、エボラ出血熱など）の流行がいかに破滅的であ

るか私たちは見てきました。人為的な災害もあります。近代の戦争は二〇世紀において何百万もの死という、自然災害をはるかに超える犠牲をもたらしています。軍国主義の精神は悪性の癌のようなもので、近年では町の中心部、大規模商業施設、劇場、電車、飛行機などにおけるテロリズムと大量殺人という形の転移が見られます。近代技術が大規模破壊目的に利用されているのです。

災害が起きたとき、私たちのうちに深い関心と不安が生まれます。こうした危機的状況により、強大な力の前に私たちがいかに無力であるかを突きつけられます。破壊的な力に迫られたとき私たちは無力感を覚えます。そのみならず、破壊的な出来事は人のいのちと資産の喪失をもたらすため、私たちは自分たちが想定していなかった経済的な重荷を負わされることもあります。北米においては、近年大規模な嵐が川沿いや沿岸部において被害と損失をもたらしたため、保険会社はそうした地域における補償をしない方針に切り替えました。強風や洪水による損害のリスクを計算することは難しすぎるのです。そして言うまでもなく、保険会社は慈善団体ではありません。

近代国家には起こりうる様々な災害に備えていることが期待されています。一九七九年四月一日、ジミー・カーター米大統領はアメリカ合衆国連邦緊急事態管理庁（FEMA）の設立を承認しました。カーター大統領の行動について多くの人々が、不必要な政府機関を作っただけだと批判しました。二〇〇〇年頃には何名かの議員がFEMAの閉鎖を主張していました。そんな中、二〇〇五年八月二十九日、ハリケーン・カトリーナの強風がルイジアナからフロリダまで四〇〇マイルにわたる湾岸地帯を直撃しました。湾岸沿いに居住していた何十万人もの人々が避難を強いられました。ハリケーン・カトリーナの被害は一千億ドルと推定されています。過去十年の間、アメリカは多くの災害に見舞われました。山火事、洪水、干ばつ、大吹雪などです。今日、FEMAはなくてはならない政府機関だと見られています。

二〇世紀は耐震工学が大幅に発展した時代でした。耐震工学に携わる科学者たちは地震活動のすべてを研究します。

彼らは、地震を探知しその強さを計測するための高度な機器を開発しました。地震予知のための高度なツールも開発し、人が地震に備えられるようにしました。橋梁や種々の建造物に関して新たな建築基準が設けられ、より耐震性が上がるようにもなりました。日本はこの分野で先端を行っています。合衆国では地震被害を特に受けやすいカリフォルニアに地震調査研究所の多くがあります。こうした調査への巨額投資は、政府によって新たな建築基準があらゆる建物について設けられることと、地震の衝撃に耐えうるより安全な建物が建てられることにつながりました。日米両国の統計からは、こうした対策によってあらゆる構造物が改良されたことが明らかになっています。地震をなくすることはできませんが、私たちはよりよく備えることを学びました。⁽¹⁾

残念なことに、こうした科学と技術の進歩による益は全世界に均等に行き渡っているわけではありません。例えば、ハイチは、極度に貧しく、二〇〇年にわたって劣悪にしか治められておらず、自然災害への対策をわずかしかなかつた国の一例です。二〇〇八年に強力な地震がハイチを襲ったとき、首都ポルトープランスや田舎にあつた公共施設や住居は破壊されました。国全体の被害は計り知れませんが、世界中の人々や政府が立ち上がり支援しました。何十億ドルもが再建のために寄附されましたが、今もこの国は壊滅的狀態にあります。多くの人々はいまだに仮設住宅に住み、衛生状態も安全な飲み水の供給も不十分な中で生活し、限られた医療しか受けられないでいます。

さて、今日私が論じたいのは、災害に備えることが可能であり、また備えなくてはならないということです。ただし私は、科学的・技術的備えに関心があるわけではありません。私はそれらの専門家ではないのですから。むしろ、私はクリスチャンとして、災害に備える上で重要な神学的・道徳的側面について論じたいと思います。本論ではまず、歴史の中から、ひどい災害に見舞われたとき、それまで時間をかけて築いてきたクリスチャンとしての「資源 (resources)」「フлакティス」に「注…有形無形の資産、財産、力の源」をもとにして、めざましい応答をした二つの共同体の例を簡単に紹介します。それに続いて、クリスチャン・アイデンティティの基礎としての実践に目を向けます。

災害は、破壊的な力が通常期 (ordinary time) 「訳注：時間が普通に流れているとき、また、教会暦におけるペンテコステとアドベントの間の時期も指す」に割り込む出来事と言えるでしょう。この二つの共同体の例では、いずれも危機的状况の中で、悪の犠牲者に対して類いまれな思いやりを發揮しました。本論ではどちらの共同体もクリスチャンの**実践**によって災害に対応できるよう整えられてきたことに注目します。実践が災害と向き合うための「**霊的な**」資源を備えることにつながったのです。そういう意味では、災害の中からも良いものが出ることはあり得ます。どういふことをたとえて言うなら、災害が来ることは、普段自分では見ることのない自身の姿を反映する巨大な鏡が私たちの前に設けられるようなものなのです。災害は直接的な影響を受けた人々の人格の本質を素早く露呈します。危機の間、人が素早くその場で応答しなくてはならないとき、人の本当の人格とアイデンティティがあらわになります。私たちは普段、自分の取るべき行動について時間を取って検討します。社会の期待を加味して私たちの応答を計算します。「何が他の人に好印象を残すか?」「何が私の評価を共同体の中で高めることにつながるか?」などの問いに導かれて結論を出します。しかし天変地異が起きたとき、注意深い計算をする時間はありません。素早く断固とした応答が求められます。瞬間的にその人のアイデンティティが明らかにになります。そして、整えられたクリスチャンによって、福音が力強く証しされます。「災害は大変悲惨でありながらもその中から良いものが出ることもあり得る」ということはたとえそうですが、そういうことです」。

私はこの主題を、**実践**という切り口から考えてみたいと思います。実践は、クリスチャンの人格また弟子としての歩みが形成される過程を理解するために有益な概念として、ここ数十年注目されています。近代は宗教への献身を弱めてきました。「アメリカでは」地域教会の会員名簿に名を連ねている人々のうちの多くが「名ばかり (nominal)」のクリスチャンでしかありません。そして彼らが名ばかりでしかないことが、クリスト教信仰の証しを弱めてきたことは広く知られています。⁽²⁾ 本質的な問いは、こうです。どのように弟子としての真実な歩みは養われるのでしょうか? 私たち

の地域教会はこの点における責任を理解しているでしょうか？

まず、実践プラクティスによって形作られ、類いまれな勇氣、誠実さ、思いやりをもって悲劇と向き合った二つのケースを通して、注意深く培われてきた実践プラクティスの力を知ることからこの問いに取り組み始めたいと思います。

ル・シャンボン村

一九三四年、三三歳のアンドレ・トロクメ (André Trocmé) はル・シャンボン村 (Le Chambon) にある改革派教会の牧師になりました。⁽³⁾ この村はフランス南東部のスイスとの国境近くにある山岳地帯の高原にあります。この地域のプロテスタント信者たちの多くは、ユグノーという、一六世紀にジャン・カルヴァンの宗教改革に連なったフランス語圏の人々の末裔でした。

一五五〇年代から一五九〇年代にかけて、ユグノーと呼ばれたフランスのプロテスタントは激しい迫害にさらされました。一五九八年にフランス王ヘンリー四世が「ナントの勅令」を發布したとき、ユグノーに初めて市民的権利が限定的ながらも与えられました。宗教的少数者の境遇は一時改善したものの、一七世紀に宗教戦争が再燃するにつれユグノーへの迫害は激しさを増しました。一六八五年、ナントの勅令はルイ一四世によって廃止されました。フランスのプロテスタントが選べる道は実質三つでした。(1)カトリックに改宗する、(2)国教会であるローマ・カトリック教会に対する武装蜂起、あるいは(3)より寛容な隣国への亡命でした。プロテスタントに対する公式の禁令は一七八九年まで継続しました。一八世紀まで生存したフランス人プロテスタントは主に社会の周縁部にいた人々でした。トロクメ牧師も含めて、ル・シャンボンの人々はそのユグノーの子孫たちでした。

アンドレ・トロクメは第一次世界大戦に大きく影響を受けました。当時十代だった彼は徴兵されるには若すぎたものの、彼の家族は特に凄惨な戦いが繰り広げられたベルギーとフランスの国境地帯に住んでいました。彼は戦争の恐ろしさを直接的に知っていました。この経験から彼は自分が決して戦争には協力できないと考えました。

一九三四年のル・シャンボンでの牧会の始まりから、トロクメは、何がその先に待ち受けているかは知らず、彼の教区民たちに弟子として歩むことの意味を忠実に教えました。この会衆はやがて二つの聖書箇所が彼らの牧師にとって特に重要であることを学びました。山上の説教（マタイ五、六、七章）と良きサマリヤ人のたとえ（ルカ一〇・二五―三七）です。人々は自分たちの牧師が細心の注意を払ってイエスの教えた靈性に歩んでいることに気づきました。牧師とその民との間に強い連帯が生まれました。

トロクメは活力に満ちた牧師でした。彼は会衆の日常に届く説教をしました。彼は悪に勝利するための詳細な青写真を提示することはしませんでした。彼の代わり、「破壊主義に抵抗してわずかな動きでもできるような機会、方法を探し求めよ」と勧めました。⁽⁴⁾すべての人は信仰を行う機会を見つけることができます。どんなに小さくてもかであろうと、それは「善をもって悪に打ち勝つ」（ローマ二二・二一―二二）ことに貢献するのです。彼が組織した聖書研究会では、信徒たちが聖書について自分たちの生活と関連づけて話し合いました。トロクメ牧師は山上の説教をクリスチャンの弟子としての歩みを形作る基本的な教科書だと考えていました。これこそが彼の説教と教えの土台となる箇所だったので、トロクメは自分の主であるイエスに深く献身し、自身の会衆が日々弟子として歩む中でイエスを見出すことを願っていました。

一九三四年には不吉な雲がヨーロッパを覆っていました。ドイツ首相アドルフ・ヒトラーはドイツを強力な軍事機構に変えようと積極的に働きかけていました。彼はオーストリアとチェコスロバキアを侵略して支配圏を拡大し、さらにポーランドとロシアに侵攻しました。一九四〇年初頭、ヒトラーはフランスを征服し、フランスのペタン元帥を傀儡と

しました。これはヴィシー政権として知られるようになりました。ドイツはフランス北部を占拠しヴィシー政権に南部を治めさせました。

中央・東ヨーロッパからの難民はバスと電車で、ル・シャンボンも含むフランス南部の町々に到着し始めました。難民の多くはヒトラー体制に狙われていたユダヤ人でした。西ヨーロッパからユダヤ人を駆逐することをヒトラーは固く決意していました。多くのユダヤ人が何世紀にもわたってフランスに住み、フランス社会の一部となっていました。それは何の助けにもなりませんでした。ユダヤ人は全員無防備な立場に置かれました。多くは逮捕され、ドイツの強制収容所に送られ、そこで殺されました。

占領が始まる中、トロクメはまず教区内の小グループネットワークのリーダーとして三人の「責任者」(レスボンサブル)を任命しました。⁽⁵⁾これは神から来たと言える素晴らしい決断でした。トロクメは二週間に一度このリーダーたちと会いました。彼らはそれまでに二週間にわたって思い巡らしていた、あらかじめ決められていた聖書箇所についてデイスカッションしました。トロクメが彼らの思考を刺激することにより、彼らも自分たちが担当する小グループに教えを持ち帰る備えができました。これは一致をもたらすかけがえのない実践プラクティスとなりました。

占領期の始まりからアンドレ・トロクメは政府への協力を拒否しました。一九四二年八月、知事はトロクメの非協力的な立場と、他の人々にもそうすることを勧めていることについて、彼と対峙しました。この役人は「数日のうちに、私の部下がル・シャンボンに住むユダヤ人を調べに来る」と警告しました。トロクメは「ユダヤ人とは何者でしょうか。人間ならわかりますが」と応じました。⁽⁶⁾翌二月、トロクメ、副牧師のエドアル・タイス、そして校長のロジェ・ダールシサックは逮捕・拘禁されました。驚いたことに、彼らは一カ月後説明もなく釈放されましたが、トロクメは自分が監視下にあることを知り、ル・シャンボンの抵抗運動を指導するには地下に潜るしかないと気づきました。彼の会衆はル・シャンボンに「逃れの町」(申命記一九・一一―一三)とする彼らの決意に共に堅く立ちました。彼らは「罪なき者

の血」が彼らの村で流されることを許さないと決意していました。⁽⁷⁾

トロクメとタイスは死の危険から逃れてきた難民たちのために何度も自らの命を危険にさらしました。ル・シャンボンの会衆全員と他の村人たちはネットワークを組織しました。毎日午後一時の電車で難民たちが避難してきました。ル・シャンボンの人々は彼らを自分たちの家に迎え入れました。そして難民の多くは、山を越えて安全地帯のスイスに行けるよう援助されました。中にはル・シャンボンの人々のもとに一九四五年に戦争が終結するまでかくまわれていた難民もいました。

それはまるでトロクメが村をよく練習を積んだ交響楽団に変えたかのようでした。すべての人は自分の演奏する楽器を理解しており、「楽団員」の全員がこの英雄的な演奏のため彼らを整えた指揮者に全幅の信頼を置いていました。結果として、何千ものユダヤ人男女と子どもたちがスイスに逃げることができました。また終戦までル・シャンボンにかまわれていた人々もいました。

トロクメがナチスに反抗するために人々を動かした際立ったリーダーシップを記念して、イスラエルのホロコースト記念館ヤド・ヴァシエムは彼の没後、「諸国民の中の正義の人賞」を一九七二年に授与しました。メダルに伴う表彰状ではトロクメを「自らの命を危険にさらして、ユダヤ人撲滅の時代にユダヤ人を救った」と称えました。⁽⁸⁾

ニツケル・マインズ小学校

二〇〇六年一〇月三日のニューヨーク・タイムズ紙の一面には「アーミッシュ学校で男性が一一名を銃撃、女子生徒五名死亡」の見出しがありました。このニュースはテレビ、ラジオ、そしてSNSを通して世界中に広まりました。

人々は衝撃を受けました。

一〇月二日、チャールズ・カール・ロバーツ四世はペンシルバニア州ランカスター郡ニツケル・マインズ近くにあるアーミッシュ校の校舎に到着しました。男子生徒たちに外に出るよう命じたあと、彼はドアを封鎖し、午前一時過ぎに六歳から一三歳の一〇名の女子生徒を銃撃し、五名を殺し、他に重傷を負わせました。それから彼は自殺しました。数時間のうちにこの恐ろしいニュースは世界中に広がりました。

およそ十年たった今日に至っても、誰も何が「チャャーリー」・ロバーツをこの考えられないような犯行に及ぼせたのか説明しきれません。彼は地域の人で、多くのアーミッシュと友好な関係を持っていました。彼の家族には三人の小さな子どもがいました。アーミッシュは敬虔で平和な生き方を通して自分たちの信仰を宣言する人々でした。そんな共同体の無実の子どもたちをなぜ攻撃しようなどと思つたのでしょうか？ その問いは答えのないままです。

この出来事が世界中で注目された理由は、理解不能な悲劇であつたことその他に、自分たちの娘たちを殺されたアーミッシュの家族からの、殺人者の家族を気遣う素早い応答があつたことでした。事件から数時間以内にアーミッシュ共同体の人々はロバーツ家に手を差し伸べ始めました。アーミッシュは殺人者に赦しを表明しました。彼らはチャャーリー・ロバーツを隣人また友人として知っていました。このようなひどい行動は重度の神経衰弱によるとおおむね一致した理解を持っていました。彼らはロバーツ家の未亡人と子どもたち、また父母・義父母に対して弔意と友情の手を差し伸べました。ロバーツ家は事件に衝撃を受け震え上がっていました。彼らはアーミッシュの隣人たちを大切に思い友好的な関係を持っていました。四〇名以上のアーミッシュがチャャーリー・ロバーツの葬儀に出席しました。多くのアーミッシュがロバーツ夫人と子どもたちを経済的に支えるための特別基金に貢献しました。

人々は今も問います。なぜこのアーミッシュ共同体は赦しと思いやりと友情の精神をもつて迷うことなくロバーツ家に手を差し伸べることができたのか？ この問いには簡単に答えられません。アーミッシュはこのような事態にどのよう

に応答するかを三世紀以上にもわたって実践を、あるいは準備を積み重ねてきたのです。アーミッシュの霊性は山上の説教の中にある主の祈り（マタイ六・九―一三）に基礎づけられています。「マタイの福音書がアーミッシュの赦しの根拠としたら、主の祈りは主根である」¹⁰。アーミッシュの家族は毎日、一日の働きを始める前と就寝前に主の祈りを祈ります。一番初めに子どもに教えられる御言葉はこの箇所なので、五歳までに子どもは「主の祈り」をドイツ語と英語で暗唱できるようになります。ゲラッセンハイト（ドイツ語）、神の御心に自らを委ねること（*submission*）は、アーミッシュの生活において一貫したテーマです¹¹。主の祈りを一日何度も祈ることはこの態度を強化します。「私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました」（マタイ六・一二）。罪のない人はいません。すべての人が神の恵みを求めて祈らなくてはなりません。

ル・シャンボンとニツケル・マインズについての考察

この二つの事例にはいくつもの共通点があります。（１）ル・シャンボンの改革派教会とニツケル・マインズのアーミッシュ共同体は御言葉、特に山上の説教と主の祈りに向き合い続けてきたことで形作られてきました。（２）イエスの言葉と行動はクリスチャンの弟子としての歩みの規準として共同体の中で強調されてきました。そして（３）イエスが、自分の命が危険にさらされているときでさえ、他者に対して暴力をふるうことを拒んだことも含めて、弟子たちに自分に倣うように求めたことが、イエス・キリストを主として忠誠を尽くすことの本質的なこととしてどちらの共同体でも受け入れられていました。

どちらの事例も壊滅的な暴力に対するクリスチャンの集団による応答ですが、弟子としての実践が災いと向き合え

るように彼らを整えたことに気づかされます。

近代の遺産

さて、啓蒙主義はヨーロッパにおいて一七世紀に始まった重大な知的革命でした。それまで存在していた、過去によつて正当性を得る伝統的世界観との決定的な断絶を啓蒙主義は意味しました。ピーター・ゲイは啓蒙主義についての彼の研究の最終書でこのように観察します。「知的なヨーロッパ人たちは新しい命の感覚に目覚めた。彼らは自然そして人の上に君臨する力を体験した。無慈悲な伝染病の繰り返し、飢饉、命のはかなさそして短命、破滅的な戦争と不安定な平和、それらすべての上に君臨する力を」⁽¹²⁾。この革命は、近代的認識論において最も直接的に表現されました。この近代的認識論は、抑圧的な伝統主義から人類を解放する革命的な新しい知識を約束するものでした。『近代とは何か——その隠されたアジェンダ』(Cosmopolis: The Hidden Agenda of Modernity)⁽¹³⁾において、ステイヴン・トゥールミン(Stephen Toulmin)はこのパラダイム変化の広範囲に及ぶ影響について考察します。科学者そして哲学者として訓練を受けた者として、トゥールミンは啓蒙主義の認識論の興りを検証し、それが伝統的な認識論を駆逐し代替しようという「宣教的」熱情に突き動かされていたと指摘します。啓蒙主義思想家たちはそれまでの認識論を「伝統的」、すなわち時代錯誤的と評価しました。それまでの世界観は伝統に訴えることによつて正当化される、静的な実在理解によつて成り立っていると批判されました。対照的に、近代的な世界観は四つの普遍的な特徴により定義されました。合理性、普遍性、自律的もしくは自己言及的自我、そして科学をすべての知の裁定人としました。近代の狙いは伝統的な認識論を廃棄し、上記四つにより特徴づけられる新たな認識論と置き換えることでした。人類を共通の世界観で統一するという目

標は説得力がありました。しかしそれは夢想的でもありません。

この目標達成のため、近代は知識を脱文脈化 (decontextualize) し始めました。そのためには、科学的な規準に満たなかった歴史・文化による様々の影響は廃棄されなくてはなりませんでした。研究室で実験可能な、科学的手法により検証された経験的事実のみが事実に基づく知識として考慮されました。これにより事実と価値の間に壁ができました。「事実」は客観的で価値判断の影響を受けない科学的な知識でした。「価値」は主観的で実証不可能でした。近代は科学的知識を称揚し、価値を役に立たないものと蔑みました。宗教は一種の迷信とされ公共の場には認められませんでした。近代は、公共の場における言論は科学的合理性に裏付けられたものに限定されなくてはならないと主張し、価値は、宗教的確信も含め、私的なものであり、容認されども尊敬されないものと位置づけられました。

啓蒙主義は全世界に影響を及ぼす強力な運動となりました。その影響は広範にわたり、すなわち全世界的でありかつ集中的 (顕微鏡と実験室に象徴されるように) であると言われました。すべての知識の領域は、神学と聖書学も含めて、「科学的」規準に従わなくては学術的尊敬が得られないようになりしました。しかし二〇世紀中葉にはこの世界観の欠陥が明らかになってきました。先述のステイヴン・トゥールミンと『科学革命の構造』(The Structure of Scientific Revolutions)^[4]の著者トーマス・S・クーン (Thomas S. Kuhn) はポストモダンの認識論を先駆的に唱えた知識人の代表です。この変化を包括的に分析することは私たちの目的の範疇外ですが、この変化が神学の領域にどのような影響をもたらしたかの一例を次に挙げます。

これまでの議論で明らかにしてきたとおり、文脈 (context) の廃棄という啓蒙主義の目標は的外れなものでした。人間の文脈に根ざさない知識は不毛なものとなります。近代は科学と技術の発展に巨大な貢献をしました。今日どんな領域であっても科学の実によらない生活は考えられないでしょう。しかし、社会科学と人文科学の分野については、科学的合理性がすべての領域において必要十分であるという近代の主張は誤ったものでした。人間の現実、マックス・

ウェーバーが言う近代の「鉄の檻」に閉じ込めきれないほど、あまりに豊かで複雑なのです。科学の力はその問題解決能力にあります。しかし科学は究極の問いに答えをもっていません。人はなんのために生きるのか、という問いです。

台湾人の神学者で教会指導者でもあるコウ・シヨウキ (Shoki Coe, 黄彰輝) は、神学教育財団 (Theological Education Fund: TEF) の理事長就任後最初の年報で、「文脈化」(contextualization) 「訳注・文化脈化とも」という言葉を神学者たちの間に紹介しました⁽¹⁶⁾。この用語は、福音宣教の目的を表現するに相応しい、新鮮で有効な言葉を求めての、コウによる二〇年間にわたる模索の結実でした。福音がすべての聴き手の人生の文脈に届くには、聴き手の「心に響く言葉」(heart language) で語られる必要があるのです。イエス・キリストにある救いの良い知らせは、「外国訛り」のない神様の語りかけとして聞けるよう伝えられなくてははいけません。コウは一八五〇年頃に異文化宣教運動の中において現れてきた「土着の教会」(indigenous churches) を興すことをめぐる葛藤をよく知っていました。どう考えても土着化(indigenization) は成功していませんでした。コウ自身が台湾の台南神学大学で一九四八年から一九六五年まで学長でしたが、彼は自分の学校が台湾ではなくイギリスの教会を意識したイギリスの講義概要を使って牧師養成をしていることに気づいていました。またこれがアジア、アフリカ、ラテンアメリカにおける神学教育においては一般的な状況だとも気づいていました。これは大変な懸案事項で、コウはこの状況が変わらなくてはならないと確信していました。文脈化はまず神学教育において、外国ではなく自分たちの文脈で仕える牧師を訓練するところから始まらなくてはなりません。TEFは神学教育が刷新されるためには文脈化に基礎を置く必要があるという訴えの先駆者となりました。

文脈化の概念を紹介したとき、コウは同時に土着化を廃棄することが目的ではないと強調しました。むしろ、彼の意図は土着化理論が行おうとしたことを保持しつつ、その先に行くことだったのです。本当の文脈化プロセスは、その文化に生まれ育ち、その文化の言葉を外国の訛りなく話す人々によって導かれなくてはありえません。宣教師やその他外部からの関与はそのプロセスを振興し支援する上で重要な役割を果たすことができますが、本当の文脈化は土着の人々

が先導し土着の素材を用いることよつて起ります。ここで特筆したいのは、聖書協会が方針を変えたことです。一九九〇年以來、ほぼすべての聖書翻訳は、第二言語としてその土地の言葉を覚えた外国人ではなく、ネイティブ・スピーカーの手によつて行われています。

特に注目し値するのは、「文脈化」が急速また広範に受け入れられたことです。過去四〇年の間、神学、聖書学、歴史学、社会学、人類学などの分野にこの概念は進出しました。「文脈を廃そうという」近代の締め付けは破られたのです。現在次第に認められつつあるのは、近代を触発した「普遍性」は、世界中に様々な形で広がる人間の経験の「特殊性」との緊張関係なくしては存在できないということです。これらの発展はまた新たな主題の登場に道を開きました。ここから私たちは、弟子としての歩みについて、神学的思考を近代の合理的・認知的側面への強調より先に向かわせるために多くの神学者に用いられている「実践」プラクティスという概念を通して考えます。聖書の本質は、ヤハウェが自らのことを創造主として、贖い主として、そして宇宙を統べる主として礼拝する人々を恋慕う偉大な物語なのです。

この世におけるキリストの体

教会の本質と使命についてその後大きな影響を与えた議論が綴られている *The Household of God* において、レスリー・ニュービギン (Leslie Newbigin) は以下のように考察します。

私たちの主がそのあとに残していったのが書物ではなく、信条でもなく、思想体系でもなく、会則でもなく、目に見える共同体だったことには、汲み尽くせないほどの意味があります。……彼は救いの業の全体を

その共同体に託しました。……その共同体は、思想が第一で共同体は二次といった思想中心のものではありませんでした。この共同体は主ご自身の意図的な選択によって呼び寄せられ、彼に在って新たにされ、そして……彼が何者であり何を成し遂げたかを明らかにしようとして……求めているものです。実際の共同体が第一であり、共同体についての理解はあとから追従するのです。⁽¹⁶⁾

ニュービギンは、教会を機能や働きによって定義するという私たちが陥りがちな誤りを改め、代わりにイエス・キリストが教会に意図されている本質的な目的に目を向けることを勧めます。イエスはこの世においてキリストの体であるために教会が存在するようにされました。時を超え聖霊の働きによって、イエスはこの集団を、生きた証しとして「あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるため」(ヨハネ一七:二一b)、召して、聖別しました。別の言葉で言うなら、教会は世界に対して継続的な使命を持つているのです。すべての世代において、クリスチャンは神の救いの業を証しするという本質的な召命にどのように応えるかという観点から、自分たちの弟子としての実践プラクティスのあり方を徹底的に点検し評価しなくてはなりません。同書においてニュービギンは教会を「福音を解釈させるもの」(hermeneutic of the gospel)と呼びます。世は福音を知りません。しかし世が見る、クリスチャンの弟子たちの日々の生活で実演パフォーマンスされることは、彼らの「うちに働く力」を指し示す強力なヒントとなり得ます(エペソ三:二〇)。

グレン・スタッセン (Glen Stassen) の挑戦的な著作 *A Thicker Jesus* 「訳注: 未邦訳、題直訳『より厚いイエス』」。ここの厚い (thick) とは、人の行動について記述するとき、その行動だけでなく、行動の意味もわかるように前後関係や状況も記述する、エスノグラフィー (民族誌) における厚い記述 thick description からの援用。対して、文脈に触れず、行動しか記述しなければ「薄い記述」である。この概念は『文化の解釈学』(The Interpretation of Cultures) で文化人類学者のクリフォード・ギアツが紹介したことにより、広く知られるようになった」は、世俗的近代が神学的・倫

理的思考の「薄まり」にどのようなつながったかの考察から始めます。⁽¹⁷⁾ この考察は先述の脱文脈化の及ぼした影響についてもう一つの視座を与えてくれます。それによれば、近代における生活のスピードと、これまた近代の人々が経験する頻繁な場所の移動は個人的な関係と位置感覚の喪失に寄与しました。それと同時に並行的な変化として、聖書の物語がイエスとその周りの人々との真剣なやりとりを「厚く」描き出していることの重要性を私たちが評価しなくなったことを「スタッセンは」指摘します。彼の本の副題 *Incarnational Discipleship in a Secular Age* 「世俗的時代における弟子としての受肉的な歩み」は、中心主題をよく表しています。彼は次のように観察します。「事実として受肉の教理を受け入れるだけでは不十分である。……受肉は、私たちが受肉して来られたイエス・キリストが何を行い、何を語ったかに注意を向けさせる。彼がいかに自分の責任を、他者への思いやりを持ちながら受け入れたか。彼の行った数々の具体的な人間解放の業。彼の誠実さについての個別具体的な教え。そして彼がいかに、イスラエルの預言者の伝統を成就する形で、エルサレムの政治的権力者たちの不正義と対決したか」⁽¹⁸⁾。神学的・倫理的思考が実際の生きた経験と照らし合わせられないとき、私たちは生活からかけ離れた抽象的な知的枠組みへの後退を余儀なくされます。

ル・シャンボンとニッケル・マインズにいた「キリストの」弟子たちはスタッセンの唱道する「受肉的な歩みをする弟子」としての歩みの秀でた見本でした。彼らはイエスについて行くことにおいて実践プラクティスを積んでいたのです。彼らの生活には弟子として歩むことが組み込まれていたのです。彼らの信仰は実践を重ねた信仰 (practiced faith) でした。危機が来たとき彼らは備えができていました。ある確信や価値に命をかけた人たちの「厚い記述」を詳しく学ぶとき、信仰の基礎を私たちは発見します。例示したような人たちは抽象概念に頼ってではなく、深い信仰と神の統治への献身に導かれた結果そのように生きたのです。

私たちが「名ばかり」あるいは「受け身」なキリスト教と呼んできたものは、キリスト教徳倫理学 (Virtue Ethics) 「訳注：人がいかに良い行動をするかより、人がいかに良い人間になるかに焦点を絞る倫理学のアプローチ。義務論や

帰結主義とともに倫理学の三大アプローチの一つ」の存在に特徴づけられる、弟子としての徹底した歩みと区別されなくてはなりません。キリスト教徳倫理学において、実践は三つの理由により重要です。第一に、教会の持つ実践は、効果的に行われるとき、神の恵みに参与します。別の言葉で言えば、神の恵みが実践によって仲介されるのです。第二に、聖霊によって生きている教会は、実践により「聖霊によって生きていることを」具体的に現し、他者に影響を与えます。第三に、「教会の」実践は長い歴史に試されてきました。キリスト者共同体の生活はキリスト教徳倫理的な実践により形作られ、またこれらの実践が地域の他の人たちを祝福する手段ともなります。別の言葉で言えば、教会は生きた伝統によって証して仕える存在なのです。⁽¹⁹⁾

実践の理論

誤解される危険もありますが、私はこの小論に「実践の理論」についての考察を入れることにしました。「実践の理論」とは何でしょう？「理論」という言葉は日常会話でいろいろな形で使われています。(1)未知のことについての憶測、推測のこと、(2)検証を待つ仮説・推論のこと、(3)あるいは「因果関係」を説明する前提の集合である、などの用法があります。近代史において最も有名な理論はアルバート・アインシュタインの相対性理論です。彼は「理論」を、ある事物を説明するための概念、あるいは基本原則の集合と捉えました。

イエス・キリストの忠実な弟子となるのは、彼が弟子たちに教えた美徳を実践することによると私は信じています。ですから、「実践の理論」は重要です。若い金持ちからどのようにして「永遠のいのち」を得られるのかを問われたとき、イエスは「実践」を挙げて答えました(マタイ一九：二六―二二)。この若者は、「イエスの挙げた、」ユダヤ

の律法において定められていたこれらの実践^{プラクティス}について、「律法的な」理論で理解していました。「どういうことかという」と、彼はこれらの実践^{プラクティス}に内在的な力があると信じていました。これらの決まりを忠実に守ることによって、彼は功徳を積むものと考えていました。そして、明らかにこの男性は不満でした。彼は決まりをすべて守っていたのですが、なお満たされていませんでした。何かが足りないように思われました。イエスはただちに男性の問題を察知しました。彼はこの律法主義的な見方に対して、これらの実践^{プラクティス}を、神に相応しい美徳の現れとして解釈する理論をぶつけて、異議を申し立てます。別の言い方をすれば、神がモーセに与えた十戒は、決まりの順守そのものを目的とするより、その先に向かうようになるとき初めて意味を持つのです。イエスはこの「若い金持ち」が愛、思いやり、誠実、忠実の真の源である神に自らを完全に委ねることに奮起させようとしたのです。⁽²⁰⁾

第二次世界大戦後、多くの聖書学者が「支配と権威」(principities and powers)の主題に取り組みました「訳注…エペソ一・二一、三・一〇、コロサイ一・一六、二・一五。またテトス三・一」。その結果、新約聖書におけるパウロ書簡の中にある重要な一連の思想の回復がもたらされました。⁽²¹⁾近代の学者たちはこのテーマを神話としか扱いませんでした。しかし二〇世紀前半における二度の世界大戦がもたらした暴力と破壊はこの世界で働く強力な悪の力をあらわにしました。これらの学者たちの考察したところは以下の三つにまとめられます。(1)「支配」は神によって造られたが(2)「支配」は神に反逆したため墮落し罪ある存在で、しかしながら(3)「支配」は贖われる、ということです。私たちが生きる時代は墮落した「支配」が人間存在の全領域で力を及ぼし続ける時です。悪は遍在し、弱者、貧しい者、社会の周縁にいる者たちは不正義によって抑圧されています。これらの「支配」は個人のみならず、政府や企業のような諸制度のうちにも働いています。それにもかかわらず、パウロはクリスチャンの共同体に「上に立つ権威」は神によって「支配」を抑えて多少なりとも秩序を維持するために立てられたものだと言います(ローマ一三・一一八)。J・W・マクレンドンはこのように言います。「支配と権威は、私たちが……実践^{プラクティス}とも呼べる……社会構造に他なら

ない⁽²²⁾」。

ここで提示している実践の理論を、近代社会理論における、特に経済学と社会学でのものと混乱させてはいけません。ライアン・ボルガーは「実践の理論は……社会秩序が『世界に意味を与える』共通の知識から生まれると理解している」と言います⁽²³⁾。実践は「共通の、おおむね暗黙で、また実際的な理解（身体化された技術、知識、ノウハウ、前提、背景知識、感情、意図）によつて構成され、結合している、定型化された人間の活動（行動と発話）である⁽²⁴⁾」と彼は定義します。すべての文化はこうした複数の実践で成り立っています。すべての実践は社会構造、すなわち「支配」によつて支えられる必要があります。これらの「支配」と実践は不可分なのです。

福音書では、イエスの宣教が、宗教的・政治的指導者たちのような、社会構造を支配し、人々を抑圧する実践を行つている人々との対決として描かれています。同じテーマは書簡にも頻繁に登場します。例えばパウロはコロサイ人に「神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました」（二・一五）と言います。弟子たちはこの「支配」との戦いに加わることに召されています。この戦いでは、不正義と対決し、差別的な社会学に対峙し、悪魔的な力に支配されている者を解放し、絶望する人々に希望を宣言し、災害に苦しんだ人々の傷をふさぎ、地震と津波によつて住まいを破壊された人々に行く場所を備え、神のメシヤとしての支配がすべての人々に到来したことを宣べ伝えます。

実践のカリキュラム

カリキュラムとは学びの計画です。カリキュラムが効果的なものになるためには、明確な目的がありそれが学習の結

果に反映されなくてはなりません。学生の役に立つ教科書と副読本の提示も必要です。また一連の主題や題材を取り扱うコースになります。最後に、学生が内容を身につけるためにしなくてはならない「宿題」が課されます。もし学生が楽器演奏を身につけようとしているなら、宿題は何時間もの実践プラクティスですし、もし化学のコースであれば研究室での実験、もし歴史学であれば広範な読書でしょう。

一九七〇年以來のキリスト教倫理における重要な発展は「人格の倫理学」(character ethics)です。人格がどのように形成されるかの理解は、近代の急進的個人主義(radical individualism)によって損なわれました。この破壊的な傾向を押しとどめるため、スタッセンとガッシー(Stassen and Gushee)は三つの取るべき態度を挙げます。(1)「具体的な実践が人格を形成すること」を認めること。(2)「美德——優れた人格のしるし」を強調すること。(3)そして、人格は共同トウゴ体においてのみ形成されることを認めること。⁽²⁵⁾

イエスはよく最高の教師だったと言われます。確かに、福音書を読むと、イエスの教える姿は頻繁に見られます。マタイの福音書は教会で教材として用いられることを意図して構成されていると知られています。教会史家は山上の説教が初期の教会においては洗礼準備者のための信仰問答として用いられたことを指摘しています。残念ながら、教会が四世紀以降に安定し国教化したとき、この実践プラクティスは失われました。

デイトリッヒ・ボンヘッファーはマタイの福音書をもとに古典『キリストに従う』を著しました。⁽²⁶⁾ここで思い出したいのは、一九三〇年代のドイツ・プロテスタント教会(その当時は何百万もの名ばかりの会員によって構成され、彼らはアドルフ・ヒトラーの反キリスト教的思想を素直に受け入れていた)に対してボンヘッファーが深く失望していたことです。『キリストに従う』は偽の宗教に対する証しであり、クリスチャンの弟子を養成する教科書です。第一部、「恵みと弟子」においてボンヘッファーは本全体で展開してゆく五つの主題を紹介します。第二部は八章から成り、マタイ五―七章、山上の説教を弟子の実践プラクティスを学ぶための必須課程として説き明かします。三部と四部ではボンヘッ

ファーは、弟子たちが交わりを通して行く、証しと奉仕の業に言及します。

マタイの福音書は力強くまた簡潔にイエスの働き活気に溢れるビジョンを提示します。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」（マタイ四・一七）。待ち望まれたメシヤが神の統治をもたらすためにやってきたのです。救済史における新たな時代が始まったのです。山上の説教を歴史的・宗教的文脈に位置づけることは重要です。

イエスが最初にしたことは、その後三年間を自身といつも一緒に行動する弟子を二人選ぶことでした。それから彼はガリラヤ全土で「御国の福音を宣べ伝え」（四・二三b）、解放をもたらす神の力を示す業を行いました。類いまれな預言者がガリラヤに現れたという噂は急速にパレスチナ全土に広がりました。ガリラヤにはエルサレム、ユダヤ、そしてヨルダン川の東側からの人々が、彼を見て、彼の教えを聞くためにこぞって集まりました。

こうした巨大な反応の中、イエスは弟子たちとともに、神の統治について彼らに教えることのできる場所に後退しました。群衆が彼の使信と働きを理解していかないことは明らかでした。彼らが日々体験していたローマ帝国の抑圧的な支配に対する極度の不満に「イエスの宣べ伝えた」「神の国」は関係がないものようでした。他方、彼らはイエスの癒しや悪魔祓いに感銘を受けた様子でした。彼らは「イエスの」貧しく抑圧された人々への思いやり魅力を感じていました。弟子たちでさえイエスの使命を説明することはできませんでした。しかし、イエスが宣言していた、神が支配者である新たな秩序が到来したことの意味を弟子たちが理解することは必須でした。この後しばらくして、群衆に福音を伝えるためにイエスは弟子たちにチームを結成させて遣わします（マタイ一〇・一一―一五）。

二〇世紀において、幸福の使信「マタイ五・三―一二」は自由主義に立つキリスト者たちによつて達成不可能な倫理的理想として脇に置かれていました。また保守的なキリスト者たちは幸福の使信を未来において実現される、今の時代においては権威のないものとして扱いがちでした。どちらのグループにとつても山上の説教は不都合な教えであり、そしてどちらの反応も誤っていました。イエスは自分の弟子たちに山上の説教にある美德を自分の知恵と努力によつて生

きるようには求めませんでした。またイエスは弟子たちに、これは神の裁きによって世界の「汚さ」が解決された後の、未来の時代のための教えだとも言いませんでした。幸福の使信は律法ではなく、神の恵みの表れです。

ルカの福音書では、イエスがその公生涯の始まりにおいて、まずナザレの会堂でイザヤ六一・一―二を読み、自らがメシヤ預言を成就する者だと宣言したことを綴っています。近年の研究ではイザヤ六一・一―一とマタイ五・三一―二の並行関係が明らかにされています。イエスは弟子たちに、イザヤ六一章の精神で、神の摂理的な庇護に信頼する者たちに約束されている救いを喜ぶように招いています。そうした分析も踏まえて、幸福の使信は次のような八文に「まとめ」られます。²⁷⁾

- 神の前にへりくだる者は幸いである、神は貧しくへりくだった者を省みられるから。
- 誤っていることや不正義を悲しみ、真実に悔い改める者は幸いである、神は苦しむ者と真実に悔い改める者を慰められるから。
- 神に自らを委ねている者は幸いである、神は平和の神だから。
- 人を救い、契約の共同体に回復させる、そうした正義に飢え渴く者は幸いである、神はそのような正義をもたらす神だから。
- 行動的な思いやりと、赦しと、癒しと、助けと、契約の真実とを他者に差し伸べる者は幸いである、神はそういう方だから。
- 自らのすべてを神に献げる者は幸いである、神こそが唯一私たちの全身全霊での献身を受けるに相応しいお方だから。
- 自らの敵と和解する者は幸いである、神もご自身の敵に対して愛を示すお方だから。

● イエスへの忠誠と神の統治の義・正義に由来する実践プラクティスゆえに苦しむ者は幸いである。

イエスは弟子たちを實踐プラクティスへ、すなわち幸福の使信を生きることへ召します。さらに続いて、マタイ五・二一―六・二二で「変容をもたらす取り組み」⁽²⁸⁾と呼ばれる教えがあります。この箇所で、イエスは弟子たちに倫理的課題に対して「伝統的、律法的」観点より「御国」の観点から応答することを教えます。「あなたがたは聞いています。……しかし、わたしはあなたがたに言います」の対比です。それまでの、一つ一つの伝統的な対応は律法の明確な要求を回避する方法でした。イエスが弟子たちに設定した実践プラクティスは、怒り、復讐、敵意、離婚、姦淫、誓い、施しなど、人の普段の生活のあらゆる領域に及びます。イエスが処方した実践プラクティスが「変容をもたらす取り組み」なのは、その焦点を変えるからです。もはや私たちは律法的な要求を全うしようとするのではなく、恵みミチに満ちた変容を實踐プラクティスし、幸福の使信を日常生活で生きるのであります。

山上の説教の最後、マタイ七・一二―二七で、イエスはそれまでの教えを振り返り、弟子として歩むことは主が教えたことを実践プラクティスすることだと再確認します。「だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができません」(七・二四)。主に従うことの実は、正しい生き方と行動に豊かに現れます。イエスの指導に従わないことは虚しさしかもたらしません。

結論

マタイの福音書は、イエスが神の統治をもたらし、御国についての使信が持つ意味を上演しまた教えたことについて

の記述です。幸福の使信（マタイ五：一―一二）はこの使信の簡潔な要約です。これが、イエスが彼の宣言と教えに耳を傾けた群衆に提示した霊性です。マタイの福音書は「わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るよう

に、彼らを教えなさい」（二八：二〇 a）と相応しく結ばれます。神の国は観念ではなく、メシヤであるイエスが主導する運動です。「わたしについてきなさい」（四：一九）と彼は弟子たちにキリストに似たものとなる弟子の道を歩むことへと招き、また招き続けています。このような備えが、私たちが災害が起きたときに「キリストのように」生きるものとするのです。

注

* 訳注および訳者の補語は「」に入れて示している。

- (1) この小論の執筆中、カリフォルニア州バサデイナのアメリカ航空宇宙局ジェット推進研究所に所属するユン・サンホ博士による、地震による被害を特定し評価する新しい技術についての記事がありました。二〇一五年四月二五日にマグニチュード七・八の地震に破壊された中央ネパールを、合成開口レーダーを搭載した COSMO-SkyMed 衛星が撮影しました。地表は既に「合成開口レーダー」によってマッピングされていたので、地震後四日経過してからの調査は地震以前の映像と比較することができ、破壊の場所と度合いの評価が可能になりました。この技術の実用化は、地震直後に被害を的確に発見・評価し、より迅速な救助・救援活動が行われることにつながると見込まれています。（*The Economist*, Nov 14, 2015, 54-55）
- (2) Eddie Gibbs, *In Name Only: Tackling the Problem of Nominal Christianity*. Wheaton, IL: BridgePoint, 1994.

- (3) Philip Hallie, *Lost Innocent Blood Be Shed*. New York: Harper Perennial, 1979; Reprint ed., 1994, 350. アンデル・トロクメ牧師の証しと働きについての感動的な記述である。邦訳：フィリップ・ハリ『罪なき者の血を流すなかれ——ル・シヤンボン村の出来事』石田敏子訳、新地書房、一九八六年。【邦訳三三七頁】
- (4) *Ibid.*, 85. 【邦訳一〇六頁】
- (5) *Ibid.*, 172-73. 【邦訳二〇七—二〇九頁】 また David P. Gushee, *The Righteous Gentiles of the Holocaust: A Christian Interpretation*. Minneapolis, MN: Fortress Press, 1994, 145-46.
- (6) Hallie, 103. 【邦訳二二九頁】
- (7) Gushee, 146. 【また、Hallie 邦訳一八五頁】
- (8) Hallie, 280. 【邦訳一六頁】
- (9) Donald B. Kraybill, Steven M. Nolt, and David L. Weaver-Zercher. *Amish Grace: How Forgiveness Transcended Tragedy*. San Francisco: John Wiley & Sons, 2007. 【邦訳：ドナルド・B・クレイビル、ステイブン・M・ノルト、デヴィッド・L・ウィーバー・ザーカー『アーミッシュの赦し——なぜ彼らはすぐに犯人とその家族を赦したのか』青木玲訳、亜紀書房、二〇〇八年。】
- (10) *Ibid.*, 91. 【邦訳一四六頁】
- (11) *Ibid.*, 100-03. 【邦訳一六二—一六五頁】
- (12) Peter Gay, *The Enlightenment: An Interpretation. Vol. 2: The Science of Freedom*. London: Wildwood House, 1973, 3. 【邦訳：ピーター・ゲイ『自由の科学——ヨーロッパ啓蒙思想の社会史』中川久定他訳、ミネルヴァ書房、一九八六頁。復刻二〇一四年。】
- (13) New York: Free Press, 1990. 【邦訳：ステイブ・トゥールミン『近代とは何か——その隠されたアジェンダ』藤村龍雄、新井浩子訳、法政大学出版局、二〇〇二年】
- (14) Chicago: University of Chicago Press, 1970, 2nd ed. 【邦訳：トーマス・クーン『科学革命の構造』中山茂訳、みすず書房、一九七一年】
- (15) "In Search of Renewal in Theological Education," *Theological Education* 9 (1973): 233-43.

- (16) New York: Friendship Press, U.S. ed., 1954, 20.
- (17) Louisville, KY: Westminster John Knox, 2012.
- (18) *Ibid.*, 45.
- (19) Jonathan R. Wilson, *Gospel Virtues: Practicing Faith, Hope and Love in Uncertain Times*. Downers Grove, IL: Intervarsity Press, 1998, 44–45.
- (20) イザヤ六四：六において預言者がイスラエルの偽の敬虔を糾弾する箇所を参照。「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のちりです」。
- (21) J.H. Yoder, *The Politics of Jesus*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1994, rev. ed. 八章がこの研究に關しての成果を総覽してまとめる。「邦訳：J・H・ヨーダー『イエスの政治——聖書のリアリズムと現代社会倫理』佐伯晴郎、矢口洋生訳、新教出版社、一九九二年」
- (22) J.W. McClendon, *Systematic Theology: Ethics*. Nashville, TN: Abingdon, 1984, 173.
- (23) Ryan K. Bolger, *Jesus for and Against Modernity: Practice-Redemption as Missiological Response to the Rules of the Modern Powers*. Pasadena, CA: PhD dissertation, Fuller Theological Seminary, 2003.
- (24) *Ibid.*, 12.
- (25) Glen H. Stassen and David P. Gushee, *Kingdom Ethics*. Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 2003, 56–7.
- (26) Dietrich Bonhoeffer, *The Cost of Discipleship*. Trans. R.H. Fuller. London: Macmillan Paperbacks ed., 1963. Translated from German 1937 ed. 「邦訳：ボンヘッファー『キリストに従う』森平大訳、新教出版社、一九九六年」
- (27) Stassen and Gushee, 33–37. 特に表2.1：幸福の使信イザヤ六一、三五頁を参照。
- (28) Glen H. Stassen, “The Fourteen Triads of the Sermon on the Mount,” *Journal of Biblical Literature* 122 (2003): 267–308. を参照。